

学力向上フロンティアスクール用中間報告

都道府県名	富山県
-------	-----

学校の概要（平成15年4月現在）

学校名	朝日町立さみさと小学校								
学 年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数
学級数	2	2	2	2	2	2	2	14	20
児童数	69	47	57	68	68	77	4	390	

研究の概要

1. 研究主題

自 ら 学 び 、 自 ら 考 え る 子 供 の 育 成
 - 一人一人の学力の向上を目指す支援の在り方（算数科を中心に） -

2. 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

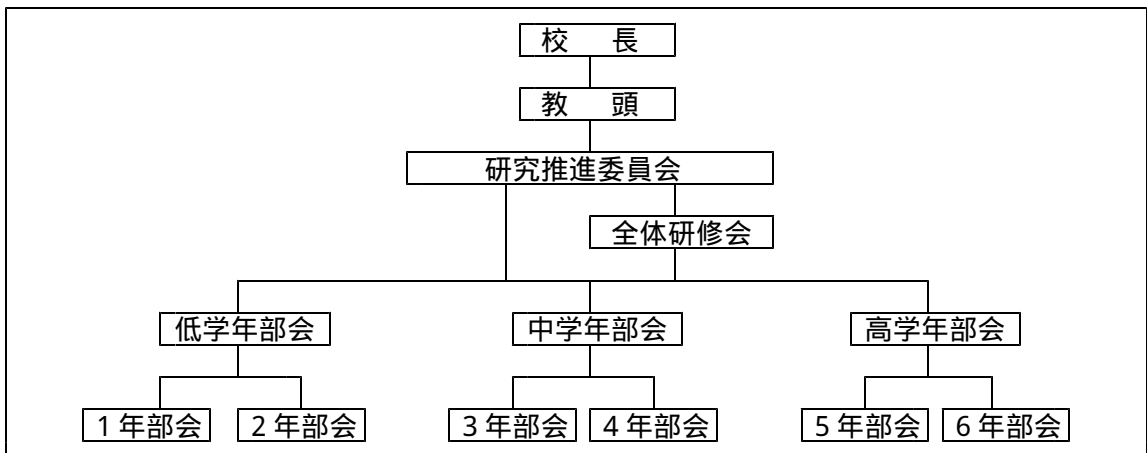
第1学年～第6学年の算数
 ・平成13年度より算数科において全学年で少人数授業を実践してきたため。
 ・児童の理解の程度に差が出やすく、また、成果が把握しやすい教科であるため。

(2) 年次ごとの計画

平成15年度	<p>テーマ 自ら学び、自ら考える子供の育成を図るための、一人一人の確かな学力の向上を目指す支援の在り方 研究の見通し 《仮説1》 指導方法や指導体制、評価方法を工夫し、個に応じた指導を行うことによって、基礎・基本の定着を図ることができる。 《仮説2》 作業的・体験的な活動や問題解決的な学習を取り入れた学習過程を工夫することによって、一人一人が自分の課題を主体的に追究する態度を養うことができる。</p> <p>研究の内容・方法 《研究内容》 個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫改善 ・子供の実態に応じた学習集団編成の工夫 ・TTや少人数授業における指導方法の工夫 ・発展的学習や補充的学習などの教材開発 ・基礎・基本の定着のための繰り返し指導の工夫 指導に生かすことのできる評価の工夫 ・個人カルテや補助簿の工夫 ・子供の願いや学びの歩みが分かる自己評価の工夫 一人一人が自分の課題を主体的に追究することのできる学習過程の工夫 ・子供の実態や興味に即した教材の開発 ・作業的・体験的な活動や問題解決的な学習を取り入れた単元構想の工夫</p> <p>《研究方法》 ・ 学年部会、低・中・高学年部会を研究の軸として研究主題や仮説を具現化し、日々の授業や研究授業を通して主題解明に努める。 ・ 必要に応じて、助言者を要請したり、他の実践校との情報交換を進めたりして研修を深める。</p>
--------	--

平成 16 年 度	<p>テーマ 自ら学び、自ら考える子供の育成を図るための、一人一人の確かな学力の向上を旨とする支援の在り方 研究の見通し 《仮説1》 指導方法や指導体制、評価方法を工夫し、個に応じた指導を行うことによって、基礎・基本の定着を図ることができる。 《仮説2》 作業的・体験的な活動や問題解決的な学習を取り入れた学習過程を工夫することによって、一人一人が自分の課題を主体的に追究する態度を養うことができる。 研究の内容・方法 《研究内容》 個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫改善 指導に生かすことのできる評価の工夫 一人一人が自分の課題を主体的に追究することのできる学習過程の工夫</p>
--------------------	---

(3) 研究推進体制



平成15年度の研究の成果及び今後の課題

1. 研究の成果

子供の学習意欲を高めるコース別学習
2年生の「ものさし名人になろう(長さのたんい)」では、学習の習熟を図る後半で、コース別学習を取り入れた。
学習内容の定着を図るための「はかるコース」「かくかくコース」の2コースを設定し、そこでの課題ができれば、よりよく基礎・基本を身に付けるための、「チャレンジコース」へと進めるようにした。自己診断テストをもとに自分自身の学習を振り返ってコースを選択し、学習を進めるようにした。子供自身がコースを選択したこと、また、多様なプリントを用意したことで、意欲的に学習に取り組むことができた。
算数的コミュニケーション能力を高めるためのグループ学習
算数的コミュニケーション能力を高めることをねらい、学習集団の編成を工夫した。例えば、第5学年「平行四辺形と三角形の面積(面積の求め方を考えよう)」では、一人追究の時間を保障した後グループ学習の場(4~5人の人数均等)を設け、グループとしての考えを練り上げた。さらに、グループの考えをホワイトボード(縦45cm、横60cm)にまとめ、発表した。少人数グループの中で子供たちは、多様な考えにふれることができ、効果的であった。
量感をとらえるための作業的・体験的な算数的学習
4年生の「小数」では、導入で「1.2ℓの水を用意しよう」と子供に投げかけた。「 $\frac{2}{10}$ 」の秘密をさぐるために、子供たちは既習学習を想起し、1ℓを10等分したものの2つ分=2ℓと考えて実際に水を測り、1ℓより多く2ℓより少ないかさを体感することができた。この体験が単元の後半の加減計算に生き、基礎・基本の定着に役立った。

アンケートの結果から

「少人数授業をどう思うか」

「よい」と思う：43%

- ・一人一人よく見てもらえる
- ・静かで話がよく聞こえる
- ・発表しやすい
- ・いろいろな意見が聞ける
- ・自分に合ったペースで学習できる
- ・違うクラスの人やいろいろな先生と一緒に学習できる

少人数授業のよさを感じ取っている。

「いやだ」と思う4%

- ・指名されやすい

発言することに消極的な子供の中に、少人数授業に対して否定的な思いをもつ子がいる。

「少人数授業を続けてほしいか」

「続けてほしい」と思う：61%

「やめてほしい」と思う：7%

1年生で「やめてほしい」と答える子供が多かった。クラスでの学習に安定を感じる子供がいると考えられる。

「算数の少人数授業を受けて、好きになったり自信がついたりしたことがあるか」

「ある」：26%

- ・学習内容がよく分かり、自信がもてた
- ・計算が速くなった
- ・よく発言するようになった。

2. 今後の課題

- ・コース別学習を取り入れる場合、子供同士のかかわり合いをどのように仕組み、教師の支援が本当に必要な子供に対していかに教師がかかわって支援していくか。
- ・グループ学習で話し合いをするときは、ねらいによってグループ編成は異なる。同じ意見をもつ子供同士や、異なる意見をもつ子供同士など、グループ編成の在り方を検討していかなければならない。
- ・習熟度別学習を単元のどの段階で取り入れるか、さらに検討が必要である。
- ・評価のための補助簿や個人カルテを検討し改良していく必要がある。
- ・研究の成果をどのように普及していくか。

学力等把握のための学校としての取組

県小教研学力調査（4月）

- ・各教科の基礎・基本の定着度を県レベルで比較するため
教研式標準学力検査CRT（目標基準準拠検査）の活用
- ・全学年の算数科で実施（2月）
- ・算数科の基礎・基本の達成度を全国レベルで比較検討するため
県小教研・県校長会チャレンジテスト（2学期、3学期）
- ・計算、漢字の基礎基本的な内容の定着度を見るため

フロンティアスクールとしての研究成果の普及

研究紀要の作成

- ・町内小中学校に配布
- ### 各種たよりの発行
- ・学校便りで取り組みを紹介し、家庭の協力を呼びかけた。
 - ・町教育センターたよりでフロンティアスクールとしての取り組みについて紹介した。

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

- | | | |
|----------------------|------------|---|
| 【新規校・継続校】 | 15年度からの新規校 | |
| 【学校規模】 | 13～18学級 | |
| 【指導体制】 | 少人数指導 | |
| 【研究教科】 | 算数 | |
| 【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 | | 有 |